

4
エスター
聖徒伝 209

自立した信仰 仕える喜び

エステル記8～10章

記念されたユダヤ人の解放

アウトライン

0. イントロダクション

I. 再度の直訴 8章

II. 第十二の月 9～10章

III. まとめと適用

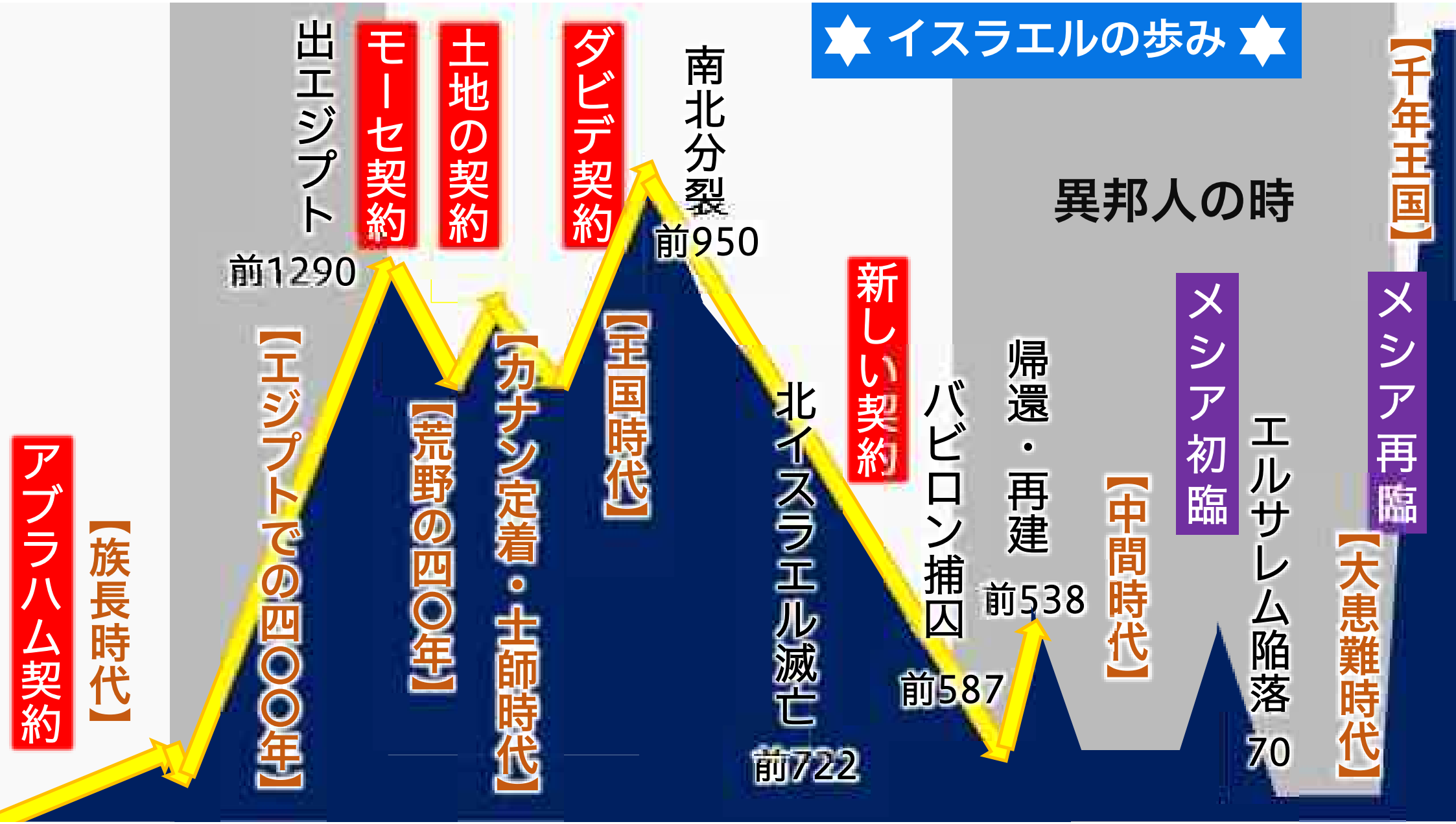
自立した信仰をもって

主に応えよう



ペルセポリスの遺跡

★ イスラエルの歩み ★



異邦人の時

【千年王国】

メシア再臨

【大患難時代】

エルサレム陥落 70

メシア初臨

【中間時代】

帰還・再建 前538

前587

バビロン捕囚

新しい契約

北イスラエル滅亡 前722

南北分裂

前950

【王国時代】

ダビデ契約

【カナン定着・士師時代】

土地の契約

【荒野の四〇年】

モーセ契約

【エジプトでの四〇〇年】

前1290

出エジプト

【族長時代】

アブラハム契約

アケメネス朝 ペルシア帝国



エルサレム

バビロン

スサ

ペルセポリス

エジプト

プリムの祭り・ユダヤの会堂でのエステル記の朗読



前回までのあらすじ

- ハマンの企みで、ユダヤ人を全滅させる法案が成立。さらには、モルデカイの処刑が画策されていた。
- 王の暗殺を食い止めた過去の功績に光が当たり、モルデカイは、主の栄誉を受ける。
- エステルは、命がけで王へ直訴。ユダヤ人の危機を訴えた。ハマンは王の怒りを買って、処刑され、モルデカイを吊す予定だった柱に吊された。



Ⅰ. 再度の直訴

エステル記8章

ペルセポリスの遺跡

報奨

ハマンの家 エステル8:1～2

その日、クセルクセス王は王妃エステルに、ユダヤ人を迫害する者ハマンの家を与えた。モルデカイは王の前に来た。エステルが自分と彼との関係を明かしたからである。

王はハマンから取り返した自分の指輪を外して、それをモルデカイに与え、エステルはモルデカイにハマンの家の管理を任せた。

- 亡きハマンに代わり、
モルデカイが王に次ぐ宰相となった。



嘆願 もう一つの危機 エステル8:3~5

エステルは再び王に告げて、その足もとにひれ伏し、アガグ人ハマーンがユダヤ人に対して企んだ、わざわざとその計略を取り除いていただきたいと、泣きながら嘆願した。

王がエステルに金の笏を差し伸ばしたので、エステルは身を起こし、王の前に立って、言った。

■ ユダヤ人殲滅の法令は有効なまま

➡ 再度、命がけの直訴をしたエステル



嘆願

王の詔書を求めて エステル5～6

「もしも王様がよろしければ、また私が王様のご好意を受けることができ、このことを王様がもっともだとお思いになり、私のことがお気に召すなら、アガグ人ハメダタの子ハマンが、王のすべての州にいるユダヤ人を滅ぼしてしまえと書いた、あのたくらみの書簡を取り消すように、詔書を出してください。

どうして私は、自分の民族に降りかかるわざわいを見て我慢していられるでしょう。また、どうして、私の同族が滅びるのを見て我慢していられるでしょう。」



勅令 王の訓令 エステル8:7~8

クセルクセス王は、王妃エステルとユダヤ人モルデカイに言った。「見よ。ハマンの家を私はエステルに与え、彼は柱にかけられた。ハマンがユダヤ人たちに手を下そうとしたからである。

あなたがたは、ユダヤ人についてあなたがたのよいと思うように王の名で書き、王の指輪でそれに印を押しなさい。王の名で書かれ、王の指輪で印が押された文書は、だれも取り消すことができない*。」

*一度出された法令は取り消せない

➡対抗する法令を出して効力を打ち消す



詔書

王の発令 エステル8:9

そのとき、王の書記官たちが召集された。それは**第三の月***、すなわちシワンの月の二十三日であった。そして、すべてモルデカイが命じたとおりに、ユダヤ人と、太守、総督たち、および**インドからクシュ***まで百二十七州の首長たちに、詔書が書き送られた。各州にその文字で、各民族にはその言語で、ユダヤ人にはその文字と言語で書き送られた。

*絶滅命令は、第12月。十分な準備期間が。

*東のインドからエジプトの南クシュまで
世界帝国ペルシアの全土に発令された。



詔書

対抗令 エステル8:10~11

モルデカイはクセルクセス王の名で書き、王の指輪でそれに印を押し、その書簡を、御用馬の早馬に乗る急使に託して送った。

その中で王は、どの町にいるユダヤ人たちにも、自分のいのちを守るために集まって、自分たちを襲う民や州の軍隊を、子どもも女たちも含めて残らず根絶やしにし、虐殺し、滅ぼし、彼らの家財をかすめ奪うことを許した。

- ユダヤ人の反撃を王が公式に認めることで、ユダヤ人殲滅法令の効力を事実上無力化



詔書

問われる姿勢 エステル8:12~13

このことは、クセルクセス王のすべての州において、第十二の月、すなわちアダルの月の十三日に、一日のうちに行うように*ということであった。

各州に法令として発布される、この文書の写しが、すべての民族に公示された。それは、ユダヤ人が自分たちの敵に復讐するこの日に備えるためであった。

*絶滅法と同日に対抗法も施行

→全民族が振る舞いを問われる事態



詔書

モルデカイの栄誉 エス8:14~15

御用馬の早馬に乗った急使は、王の命令によってせき立てられて、急いで出て行った。この法令はスサの城で発布された。

モルデカイは青色と白色の**王服***を着て、大きな金の冠をかぶり、白亜麻布と紫色のマントをまとって、王の前から出て来た。すると、スサの都は喜びの声にあふれた。

*王の権威を身に帯びた

モルデカイの栄誉に満ちた姿



詔書

歓喜と栄誉 エステル8:16~17

ユダヤ人にとって、それは光と喜び、歓喜と栄誉であった。王の命令と法令が届いたところは、どの州、どの町でも、ユダヤ人は喜び楽しみ、祝宴を張って、祝日とした。この地の諸民族の中で大勢の者が、自分はユダヤ人であると宣言した*。それはユダヤ人への恐れが彼らに下ったからである。

*ユダヤ人の特権にあずかりたいと…

➡プリムの祭りの仮想の由来、とも





II. 第十二の月

エステル記9～10章

ペルセポリスの遺跡

施行 その日 エステル9:1～2

第十二の月、すなわちアダルの月の十三日、この日に王の命令と法令が実施された。ユダヤ人の敵がユダヤ人を征服しようとして望んでいたまさにその日に、逆に、ユダヤ人のほうが自分たちを憎む者たちを征服することとなった。

ユダヤ人たちは、自分たちに害を加えようとする者たちを手にかけてようと、クセルクセス王のすべての州にある自分たちの町々で集まったが、だれもユダヤ人に抵抗する者はいなかった。彼らへの恐れが、すべての民族に下ったからである。

背後に働かれていたのは、主の御手!!



施行 諸国民の恐れ エステル9:3～4

諸州の首長、太守、総督、王の役人もみなユダヤ人たちを支援した。モルデカイへの恐れが彼らに下ったからである。

実際、モルデカイは王宮で勢力があり、その名声はすべての州に広がっていた。実に、この人物モルデカイは、ますます勢力を伸ばしたのであった。

■この十ヶ月間で、モルデカイの名声はペルシャ全土に広がっていた。

➡モルデカイへの権威も用いられた



施行 ハマン家の滅亡 エステル9:5

ユダヤ人たちは彼らの敵をみな剣で打ち殺し、虐殺して滅ぼし、自分たちを憎む者を思いのままに処分した。

ユダヤ人はスサの城でも五百人を殺して滅ぼし、また、パルシャンダタ、ダルフォン、アスパタ、ポラタ、アダルヤ、アリダタ、パルマシュタ、アリサイ、アリダイ、ワイザタを、すなわち、ハメダタの子でユダヤ人を迫害する者ハマンの子、十人を虐殺した。しかし、略奪品には手を出さなかった。

■ 敵対するハマンの血筋は絶やされた



施行 王の厚意 エステル9:11～12

その日、スサの城で殺された者の数が王に報告されると、王は王妃エステルに言った。

「ユダヤ人はスサの城で、五百人とハマンの息子十人を殺して滅ぼした。王のほかの諸州では、彼らはどうしたであろう。ところで、あなたは何を願っているのか。それを授けてやろう。あなたのさらなる望みは何か。それをかなえてやろう。」



嘆願

法令の延長 エステル9:13~14

エステルは答えた。「もしも王様がよろしければ、明日も、スサにいるユダヤ人に、今日の法令どおりにすることをお許してください。そして、ハマンの息子十人を柱にかけてください。」

そこで王は、そのように実施するように命じた。法令がスサで布告され、ハマンの息子十人は柱にかけられた。

■ 敵対者への徹底した裁き

➔ 主が命じ、エステルに告げさせた



施行 打たれた全土の敵 エス9:15～16

スサにいるユダヤ人はアダルの月の十四日にも集まって、スサで三百人を殺した。しかし、略奪品には手を出さなかった*。

王の諸州にいる残りのユダヤ人たちも団結して、自分たちのいのちを守り、敵からの安息を得た。すなわち、自分たちを憎む者七万五千人を殺した。しかし、略奪品には手を出さなかった。

*王の法令では認められていたが…

➔主の命令は、敵への裁きに限定?!



祝宴

祝宴と喜びの日 エステル9:17~19

これはアダルの月の十三日のことであり、その十四日に彼らは休んで*、その日を祝宴と喜びの日とした。

しかし、スサにいるユダヤ人たちは、その月の十三日にも十四日にも集まり、十五日には休んで*、その日を祝宴と喜びの日とした。

それで、城壁のない村に住む田舎のユダヤ人は、アダルの月の十四日を喜びと祝宴の祝日とし、互いにごちそうを贈り交わす日としている。

*プリム祭…エルサレムは15日。他は14日



祝宴

祝いに変わった日 エス9:20~22

モルデカイはこれらのことを書いて、クセルクセス王のすべての州の、近い所や遠い所にいる、すべてのユダヤ人に書簡を送った。

それは、ユダヤ人が毎年アダルの月の十四日と十五日を、自分たちの敵からの安息を得た日、悲しみが喜びに、喪が祝いの日に変わった月として、祝宴と喜びの日、互いにごちそを贈り交わし、貧しい人々に贈り物をする日*と定めるためであった。

*今もプリムの祭りで継承



記念

覚え書き エステル9:23～25

ユダヤ人は、すでに守り始めていたことであるが、モルデカイが彼らに書き送ったことを受け入れた。実に、アガグ人ハメダタの子で、ユダヤ人すべてを迫害する者ハマンは、ユダヤ人を滅ぼそうと企んで、プル、すなわちくじによって決め、彼らをかき乱して滅ぼそうとしたが、そのことが王の耳に入ったときに、王は書簡で命じ、**ハマンがユダヤ人に対して企んだ悪い計略をハマンの頭上に返し、彼とその子らを柱にかけたのであった。**

主が、ハマンに報いを返された!!



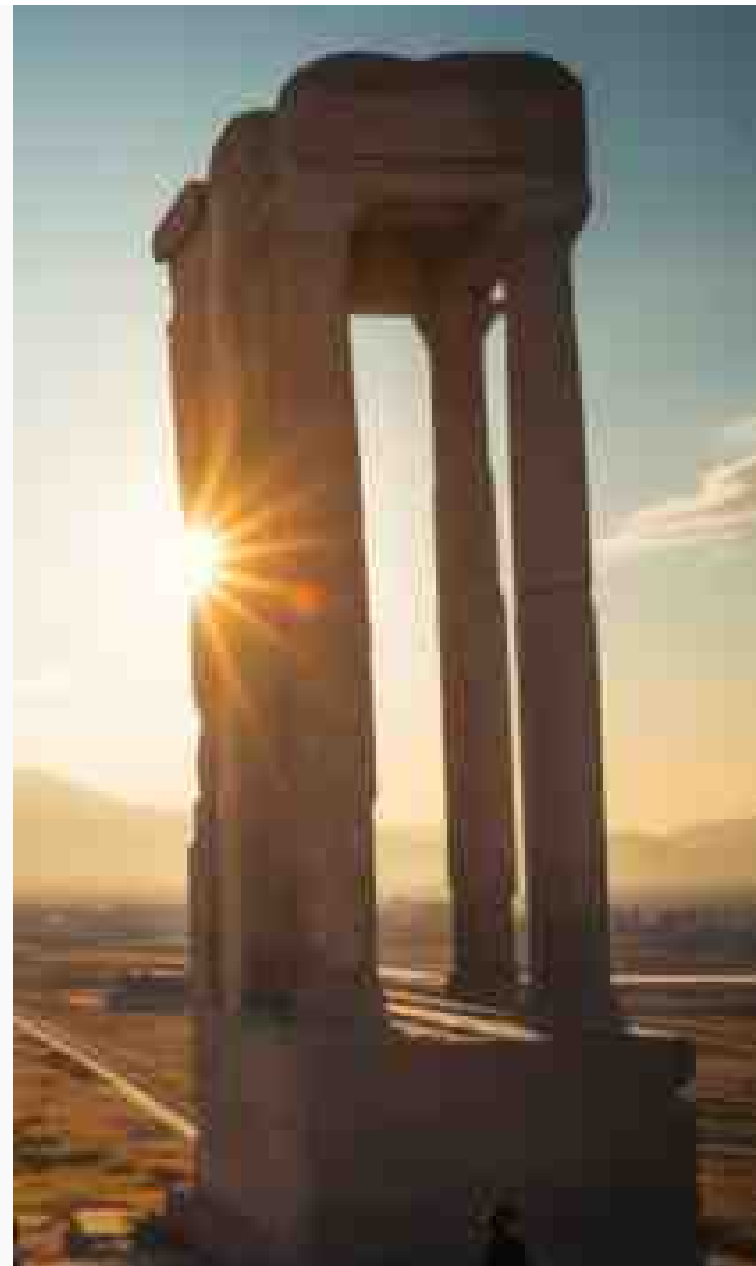
記念

プリムの祭り エステル9:26

こういうわけで、ユダヤ人はプル*の名にちなんで、これらの日をプリム*と呼んだ。こうして、この書簡のすべてのことばにより、また、このことについて彼らが見たこと、また彼らに起こったことにより、

ユダヤ人は、自分たちとその子孫、および自分たちにつく者たちが、その文書のとおり毎年定まった時期にこの両日を守り行い、これを廃止してはならないと定めた。

■覚えるべきは、くじ*の背後に働かれた主



記念

プリムの日 エステル9:28～29

また、この両日は代々にわたり、すべての家族、諸州、町々において記念され、祝われなければならないとし、これらのプリムの日がユダヤ人の間で廃止されることがなく、この記憶が自分たちの子孫の中で途絶えてしまわないようにした。

アビハイルの娘である王妃エステルと、ユダヤ人モルデカイは、プリムについてのこの第二の書簡を全権をもって書き記し、確かなものとした。

記念されたのは、主の御業



記念

刻まれた命 エステル9:30～32

この書簡は、平和と誠実のことばをもって、クセルクセスの王国の百二十七州にいるすべてのユダヤ人に送られ、

ユダヤ人モルデカイと王妃エステルがユダヤ人に命じたとおり、また、ユダヤ人が自分たちとその子孫のために、断食と哀悼に関して定めたとおり、このプリムの両日を定まった時期に守るようにした。

エステルの命令はこのプリムに関する事柄を義務づけ、書物に記された。

覚えられたのは、主の恩寵



あとがき

後代の記録 エステル10:1～3

クセルクセス王は本土と海の島々に苦役を課した。彼の権威と勇気によるすべての功績、王に重んじられたモルデカイの偉大さについての詳細、それは『メディアとペルシアの王の歴代誌*』に確かに記されている。

実に、ユダヤ人モルデカイはクセルクセス王の次の位にあって、ユダヤ人にとっては大いなる者であり、多くの同胞たちに敬愛された。彼は自分の民の幸福を求め、自分の全民族に平和*を語る者であった。

*現存しない書 *「主なる神との平和」





IV. まとめと適用

自立した信仰をもって主に仕えよう

エステル記のテーマを確認しよう

- 民族絶滅の危機に、主に向かって嘆き、祈りつつ、イスラエルへの主の約束をなお信じた、モルデカイ。
- 主の約束への信頼の内に、命がけで行動したエステル。
- 異教の国で、不信仰の民にも残されていた信仰者たち。残れる者の主への信仰により、イスラエルは救われた。

彼らが信頼したのは、主の約束に基づく恵み

主への信仰と恵みによって、イスラエルは救われた

エステルとモルデカイに学ぶ 神への忠実

主人は彼に言った。『よくやった。良い忠実なしもべだ。おまえはわずかな物に忠実だったから、多くの物を任せよう。主人の喜びをともに喜んでくれ。マタイ25:11』

- 小さなことに忠実な者は、さらに大きな使命を与えられる。エステルには、積み重ねてきた小さな信仰生活があった。
- 育ての親モルデカイを通して学んだ、主の約束と信仰も、エステルを支える礎となっていただろう。

まず目の前に与えられた、信仰の小さな課題に取り組もう

神に用いられるということは？

- 主ご自身だけで、すべてのことは成し遂げられる。
- 主の働きに用いられる。そのこと自体が一方的な恵み。
例) こどものおつかいや おてつだい
- 主は、愛する子である、あなたの成長を願い、喜ばれる。
与えられた恵みに応答して、主に用いられて行こう。

さらには御国での報酬まで用意されている!!

主に用いられる恵みを、存分に味わい知ろう!!

奉仕の価値を決めるもの

- 御言葉の奉仕者への敬意や支援は、聖書が求めていること。主の御言葉こそ、私たちが従うべき第一のものだから。
- 一方、役割の価値や働きの成果は、あくまで主が決められる。私の期待や、世の評価とはまるで関係ない。
- 私が何を成し遂げられるか、ではなく、主が私を用いて、どのように働いてくださるかに期待しよう

ユダヤ人に対する二つの態度

- イスラエルへの祝福と呪い（アブラハム契約の付帯条項）
「わたしは、あなたを祝福する者を祝福し、あなたを呪う者をのろう。地のすべての部族は、あなたによって祝福される。」
- 主が恵みの契約によって守られているイスラエル。
ユダヤ人への態度が、異邦人の運命を左右する。
例) 衰退、滅亡してきた迫害者たち
負のループから抜け出せないパレスチナ住民
イスラエルを祝福する者の幸い

ユダヤ人への祝福は、豊かな恵みを伴う契約の神への祝福

すべてが成し遂げられる終末の時

- 大患難時代の異邦人に問われる、究極の選択
 - ➔ ユダヤ人の側に立ち、迫害され、殉教するか？
 - ➔ 反キリストの側に立ち、迫害を免れ、永遠の滅びるか？
- イスラエルは、民族的回心に至り、主イエスが再臨。
神の王国でイスラエルは、主の権威を帯びた祭司となる。
- 福音を信じたすべての異邦人も招き入れられ、主に仕える。
 - ➔ 神の特権を与えられ、約束されたのが異邦人クリスチャン

主に仕える幸いを今、この時から味わい知らされていこう!!

★ 自立した信仰をもって主に仕えよう ★

- モルデカイは、信仰の決断をエステルに委ねた。
エステルは、自分自身の決断として、主に応えた。

→ 信仰者は自立を求める、主によりよく仕えるために。
- 主が私に与えられ、応答を期待されている働きはなんだろう？
- 小さな私が用いられる、そのこと自体が、主からの恵み。
主に応えて行動を起こし、恵みを味わい知らされていこう。

応答したその先に、主がさらなる恵みを用意してくださっている

てん とう
「天のお父さま。わたしの^{つみ}罪をゆるしてください

わたしは、神のみ^{かみ}子^こイエス・キリストが、

①わたしの^{つみ}罪^{あがな}を^{じゅうじか}贖^しう^しのために十字架で死に、

②墓^{はか}に^{ほうむ}葬^はられ、

③三日^{みっかめ}目に^{ふっかつ}復活^{しん}した^{しん}こと、を信じます。

しゅ めぐ うち わたし ほうし きかい あた
主が恵みの内に、私に奉仕の機会を与えてくださっています。

しゅ こた あゆ だ わたし もち
主に応えて歩み出します。どうか私を用いてください。

しゅ ようい めぐ あじ
主が用意された、さらなる恵みを味わわせてください。

よろこ かんしゃ ちじょうしょうがい あゆ
喜びと感謝をもって、この地上生涯を歩ませてください。

しゅ な いの
主イエス・キリストのみ名によって祈ります。 アーメン」